3

研究ノート
聖山式土器に伴う方形区画のある土器について

3.1　はじめに

筆者の所属する七飯町歴史館では、平成 11 年に一括寄贈された「高橋秀雄考古資料コレクション」（以下、高橋コレクション）と称する資料群を所蔵している。これらは発掘調査記録も実測図もない蒐集品で構成されており、その一部は当館常設展示室に並べられ観覧に供しているが、大部分は収蔵庫に保管され陽の目をみない。学術的に見ても興味深い資料がありながらも、あまり知られることのない不遇な状況であるといえる。よって本稿ではその中から、聖山式土器に伴うと考えられる方形区画のある土器を紹介し若干の所見を示すので、皆様からご教示をいただきたい。

3.2　高橋秀雄について

このコレクションを蒐集した高橋秀雄は、昭和 13 年に大中山尋常小学校（現七飯町立大中山小学校）訓導（教諭）として赴任したのち同校教頭を経て、昭和 22 年に大中山中学校教諭となった。昭和 28 年に室蘭聾学校へ転出するまでの間、大中山地区を中心に、町内の考古遺物の蒐集を行っていたようである。ちなみに大中山地区の遺跡は、大中山中学校教諭の高橋秀雄、池田堯、野呂進らによって踏査され、発見順に番号を付した遺跡名がつけられており、高橋が七飯町を離れた後も、野呂を中心に大中山地区の考古遺物の蒐集が学校活動として行われるなど、その熱意が引き継がれている。高橋は七飯町を転出した後も、赴任先を転々としながらも蒐集を続けていたようで、本コレクションには、七飯町のほか、函館市サイベ沢遺跡出土の円筒土器上層式や江別市出土の後北式土器、松前町、上湧別町、せたな町採集資料などを含め、土器 87 点、土偶 4 点、土製品 2 点、石器 172 点、石製玉 1 点の計 265 点からなっている。主に昭和 20 年代に蒐集されたこれらの遺物は、七飯町内でも先駆的に行われた考古学踏査で得られた貴重な資料といえ、高橋らの熱意によりこれらの遺物が後世に残されたことは幸運であったと考える。

3.3　文様帯を方形区画する土器（高橋コレクションより）

今回紹介する土器（図 3.2、3.3）は、昭和 25 年 4 月 23 日に発見されたもので、土器内部には日付のほか「亀田郡七飯村大中山宮後安一畑地出土」と記載されたラベルが貼られていた。昭和 52 年発行の『七飯町史』によると、宮後氏の畑は「大中山 3 号遺跡」と記載されており、現在の包蔵地登録台帳と照らし合わせると、大中山 3 遺跡から得られたと考えられる。（図 3.1 参照）

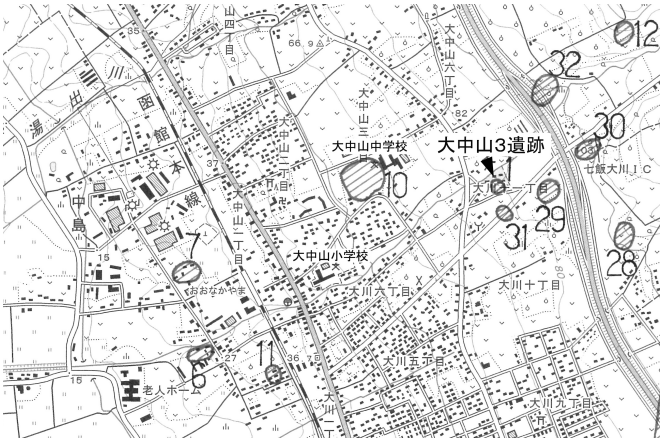

図 3.1　遺跡位置図

土器は高さ 12.0cm、径 11.8cm の完形の壺である。口縁は平縁で突起などは付されず、口唇部に 1 条の沈線を巡らせている。また、内側にも浅い沈線を一巡させ段を作出している。頸部は無文で縦方向に弱い磨きが認められ、上部には口唇と頸部を区分けするため、口唇を巡る沈線と並行

する浅い沈線を巡らせ、その一部を削るように磨いたと思われる痕跡があった。よって実測図には沈線があったものとして描いている。この無文部は肩部に巡らせた 2 条の沈線まで続き、以下、底部までは細かい LR 原体による縄文を地文としている。

文様の主体となっているのは、上方に最大径をもつ胴部で、胴部下方に 3 条の並行沈線を巡らせ、文様帯を上下に分けている。上部の文様帯は、胴部下方の並行沈線と肩部に施された 2 条の沈線を繋ぐように、3 条一組の縦方向の沈線を垂下させ、文様帯を方形に 6 区画に分け、区画内には 2 条一組の弧状の沈線を X 字状に描き、弧が接する部分の上下に三角形状のモチーフをそれぞれ配している。見方によっては X 字状の沈線が、2 条ではなく 3 条一組となるものとも考えられるが、本稿では三角のモチーフを配したと判断した。

下部の文様帯は、胴部下方の並行沈線と底部の立ち上がりに巡らせた 2 条の沈線との間を、上部文様帯の縦方向の沈線に呼応するように 3 条一組の沈線を垂下させ 6 区画とするが、上部とは異なり、区画内には何も描かれていない。体部文様の構成として上段の 6 区画には X 字状の沈線と三角形のモチーフ、下段は区画のみとなっている。

また、この土器には口唇直下に補修孔が 2 個認められる。これらは断面が四角形の棒状工具によって内側から穿孔されたと考えられ、その際にめくれた粘土片がそのまま器表面に撫でつけられ磨かれた痕跡が確認できる。さらに胴部下方に巡る 3 条の並行沈線上にも同様の工具による穿孔が１つ見られ、下部有孔土器となっている。これらの孔は土器焼成前に穿たれており、土器の内外に炭化物が付着していることから、焼成後もなんらかの用途で使用されていたと考えられる。時期は縄文時代晩期後葉、大洞 C2 式〜大洞 A 式相当を想定している。

3.4　当該期における方形区画のある土器

道南地域における該当期の土器型式としては、七飯町峠下聖山遺跡出土土器を指標に設定された聖山式土器が知られている。その文様構成は連繋入組文を主体とする I 式と横位連続工字文を主体とする II 式が一般的に知られるところであるが、聖山遺跡でも第 3 ブロックから出土した壺形土器（図 3.4-1）や第 7 ブロックから出土した壺形土器（図 3.4-2)、のように方形区画をもつものが出土している。これらの土器は、複数条を一組とした沈線で文様帯を区画する点において、大中山 3 遺跡出土土器との類似性が認められる。ここでは、七飯町近郊で出土した当該期の方形区画のある土器をいくつか紹介する。

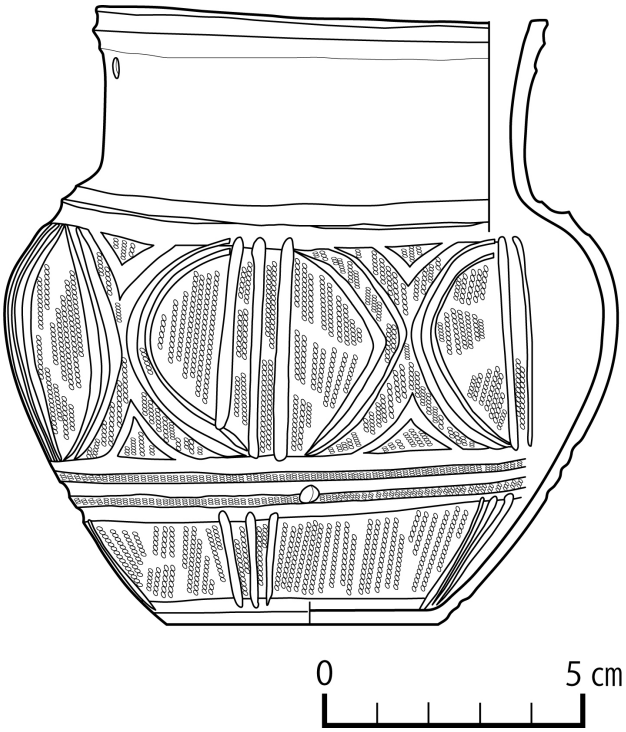

図 3.2　大中山 3 遺跡出土土器
（七飯町歴史館蔵「高橋秀雄考古資料コレクション」）

図 3.3　大中山 3 遺跡出土土器

図 3.4-1 は小形の壺形土器である。口唇に 2 条の沈線を巡らせ、やや内湾した頸部は無文、肩部と胴部下方にそれぞれ 2 条の沈線を一巡させ文様帯として、これらを繋ぐように 3 条一組の沈線によって 4 区画に分け、その区画内には三叉文を 2 つ配している。また、この 3 条一組の沈線上部には呼応するように B 状突起が付されている。

図 3.4-2 は壺形土器で、口唇に 1 条の沈線を巡らせ、その線上に B 状突起が 1 つ付されている。口縁がやや窄まる形となる頸部は無文で、肩部に巡らせた 2 条の沈線以下は LR

原体による縄文を地文としている。最大径となる胴部よりやや下方と底部よりやや上方に 2 条の沈線を巡らせて、文様帯を上下に分け、さらにこれらを 4 条一組の沈線によってそれぞれ 4 区画に分けている。下段を区画する 4 条一組の沈線は、上段の区画線の中間から垂下させ、上下の区画が半分ほどずれるように区画している。上段の区画内にはそれぞれ三叉文を 2 つ配しているが、下段の区画内には何も描かない。なお、肩部に巡る沈線上には B 状突起が付される。

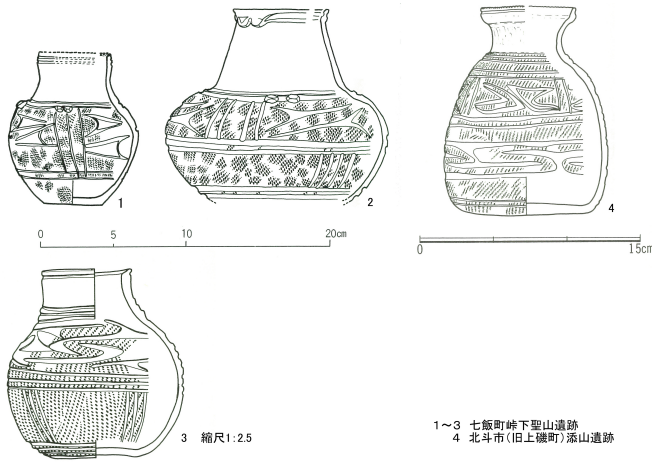

図 3.4　方形区画を持つ土器

図 3.4-3（図 3.5）は小形の壺形土器で、口縁は平縁、口唇に 1 条の沈線を巡らせ頸部から肩部にかけては無文、肩部には 3 条の沈線が一巡し、以下底部まで LR 原体による縄文を地文としている。胴部の最大径となる部分にも 3 条の沈線を一巡させ文様帯を上下に区分する。上部には連繋入組文を施し、下部は同じく 3 条一組の沈線を垂下させ文様帯を 4 区画に分けている。底部立ち上がりにも 3 条の沈線を巡らせている。

図 3.5　聖山遺跡出土壺

飯島義雄によると、図 3.4-1・2 に示した聖山遺跡出土の方形区画をもつ文様は、聖山遺跡でもわずかしか出土していないが、非主要類型のひとつである D 類に分類している（飯島 1989）。北海道大学が主体となって調査され出土した図 3.4-3 は、飯島が示すところの A 類（連繋入組文）と D 類が共存したものと捉えられる。

図 3.6　北斗市一ノ渡地区出土土器

また、北斗市（旧上磯町）添山遺跡でも類例と考えられる土器が出土している（図 3.4-4）。徳利に近い形状をした壺形土器で、口唇部に刻みがみられ、1 条の沈線が巡る。頸部は無文で内湾し、肩部に施した 2 条の沈線以下に LR 原体による縄文を施し地文とする。胴部下方に最大径をもち、肩部、胴部中央、底部立ち上がり付近にそれぞれ 2 条の沈線を一巡させ文様帯を上下に区分けし、上段の文様帯は 2 条一組の沈線を垂下させ 4 区画に分け、その区画内に弧状もしくは三叉文を変形させたと思われる沈線が対で描かれる。沈線内に地文が残される点で、大中山 3 遺跡出土土器と類似性が認められる。また下段は方形に区画されることなく、横位連続工字文が一巡する。飯島が提示するところの B 類（横位連続工字文）と D 類が共存したものと捉えることができる。

さらに、未報告資料であるが北斗市教育委員会が所蔵する壺形土器（図 3.6）も類例として提示する。これは、北斗市一ノ渡地区（旧大野町）出土土器で、口縁は平縁となり突起物は付されていない。口唇には 1 条の沈線が巡り頸部は無文部が肩部の 2 条の沈線まで続き、以下底部まで LR 原体による縄文を施し地文としている。最大径となる胴部よりやや下方に 3 条の沈線を施し文様帯をつくり、肩部とそれらを 3 条一組の沈線を垂下させてつなぎ、7 区画に分けて

いる。区画内のほとんどは他に何も描かれていないが、そのうち 1 区画だけに三叉文が描かれている（図 3.7）。

図 3.7　一ノ渡地区出土土器の部分拡大（三叉文が見える）

この土器は、ほぼ直立に立ち上がる頸部と胴部の方形区画など、大中山 3 遺跡出土土器に類似する点が多いが、こちらも蒐集された土器のようで、詳しい出土状況や共伴関係は不明である。残念ながら、本稿では実測の機会に恵まれず、文様帯下部の詳細を観察することができなかった。肉眼観察の限りでは、器表面に剥離が多く、摩滅も認められたことから、下部文様帯が区画されているかなどは確認できなかった。

3.5　若干の考察

渡島地域における縄文時代晩期の土器の中には、方形区画のある土器の出土例が少なく、まだまだ研究の余地があると考える。今回、高橋コレクションの土器を紹介し、類例と考えられるものを提示したが、当館でこの土器が眠っていたのと同様に、ほかの町にも人知れず類例となる土器があるのではないかと期待もしている。

現時点でわかっている情報から推察できることは、方形区画は頸部が無文となる壺形土器にのみみられる特徴で、これらは聖山式土器の非主要類型（D 類）に相当し、主に聖山式土器と供伴する可能性が高いことである。北斗市添山遺跡しかり、大中山 3 遺跡においても聖山式に相当する土器が出土していることも、それを裏付けられよう。

また、聖山遺跡や添山遺跡出土土器の中に、飯島の類型による聖山Ⅰ式（A 類）、Ⅱ式（B 類）に特徴づけられる文様と組み合わせて区画（D 類）が認められることから、Ⅰ式、Ⅱ式ともに、文様帯を区画するという意識があったと捉えることができるだろう。

さらに、大中山 3 遺跡出土土器に描かれた X 字状沈線とした文様は、三叉文が変化した可能性もある。その鍵を握るのは図 3.4-4 に示した添山遺跡出土土器の上部文様帯の区画内沈線にあると考えているが、残念ながら実見に至らなかったので、稿を改めて考えを整理できればと思う。

今後、こういった方形区画のある土器が、聖山式土器の分布と一致するものなのか、また、聖山式土器に伴うものとして捉えられるのなら、聖山式以後どのような変遷を辿るのかが課題となるが、本稿では、筆者の浅学さゆえ道南圏はともかく、道央圏や青森県といった東北地方での類例を調査するまで及ばなかったので、多くのご教示を賜りたい。

3.6　おわりに

本稿では、高橋コレクションから 1 点のみの紹介にとどまったが、同コレクションについては、今後も実測図を作成しつつ資料紹介できればと考えている。当館に限らず、記録が乏しい蒐集された土器を所蔵している施設は他にもあるだろう。そういった資料の中には、貴重な情報を持つものも多い。それらを眠らせることなく、広く周知できる場として本会誌が活用されることを願う。

なお、本稿における土器実測は、弘前大学人文社会科学部文化創生課程 4 年の岩瀬小夜氏に行っていただいた。この場をかりて謝意を表する。

参考文献

七飯町教育委員会　1979「峠下聖山遺跡」
七飯町教育委員会　1979「聖山」
七飯町役場　1976「七飯町史」
上磯町教育委員会　1983「添山」
飯島義雄　1989「体部文様からみた「聖山式土器」」『考古学論叢Ⅱ』pp177～210
飯島義雄　1998「聖山式土器の体部文様における非主要類型の意義」『野村崇先生還暦記念論集「北の考古学」』
南北海道考古学情報交換会　2018「南北海道の縄文土器」

山田　央（七飯町歴史館）